

大災害時代における 地域存続と歴史文化

3月2日（土）

3月3日（日）

会場

神戸大学統合研究拠点
コンベンションホール

（神戸市中央区港島南町 7-1-48）

／オンライン（Zoom 利用）

—地域歴史資料学を機軸として—

Community Survival and Historical Culture
in the Era of Massive Disasters :

Perspectives from Local Historical Materials Studies

参加費無料

3月2日（土）

13:00–13:10

開会挨拶・趣旨説明 奥村 弘（神戸大学 理事・副学長）

13:10–14:10

Local Archives as Cultural Heritage: Current European Practices and Challenges（文化遺産としての地域アーカイブズ—ヨーロッパの実践と課題）

ガーボル・シヨンコイ（エトヴェシュ・ロラード大学）

14:10–15:05

Civic Society Formation and Local Historical Materials Studies: Practical Research Projects during Major Natural Disasters in Japan（市民社会形成と地域歴史資料学—日本の大規模自然災害時の実践的研究を通して—）

奥村 弘

15:20–15:40

Symbol of Recovery from the Torrential Rain in Western Japan: New Trends in the Inheritance of Local Historical Heritage（西日本豪雨からの復興の象徴—地域歴史遺産継承の新動向）

胡 光（愛媛大学）

15:40–16:00

Current Trends and Possibilities for the Succession of Local Materials（地域資料保存・継承の潮流と可能性）

天野 真志（国立歴史民俗博物館）

16:00–16:40

Disasters and human life: New developments in research on disaster and local history（災害と人間の暮らし—地域史研究の新地平—）

今津 勝紀（岡山大学）

16:50–17:50 討論

司会：松下 正和（神戸大学）

3月3日（日）

10:00–10:45

The Imperative of Utilizing Digital: Harnessing Information Technology for the Preservation of Historical Resources and Envisioning Its Future（なぜデジタルを使うのか？歴史資料を守るための情報技術とその未来）

後藤 真（国立歴史民俗博物館）

10:45–11:45

Digital Public History: The Challenges of Real-Time History in Times of Crises（デジタル・パブリック・ヒストリー—危機の時代における歴史の「いま」の課題）

アンドレアス・フィッカーズ（ルクセンブルク大学, C2DH センター長）

11:45–12:15

Emergency Report: The 2024 Noto Peninsula Earthquake Cultural Heritage Rescue（緊急報告：2024年能登半島地震文化遺産レスキュー）

高妻 洋成（国立文化財機構 文化財防災センター長）

13:15–15:00 総合討論

司会：三村 昌司（防衛大学校）

閉会挨拶 今津 勝紀

使用言語 英語・日本語（日英同時通訳あり）

参加申し込み 〆切：2/29（木）

申込みフォームよりお申し込み下さい。

<https://forms.gle/SLQw5vob6bLgpBbo6>



3月2日（土）午後6時より情報交換会を開催します。
（参加費¥6,000、於神戸大学統合研究拠点ラウンジ）

主催：JSPS 科学研究費特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者：奥村弘, 神戸大学大学院人文学研究科）研究グループ

【お問い合わせ】657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 神戸大学大学院人文学研究科 Tel:078-803-5566 Email:kato-akie@people.kobe-u.ac.jp（加藤）

開催趣旨

私たちの生きる現代社会は、大規模自然災害の続発に直面している。地震や津波、風水害、火山噴火等の自然災害の発生件数は 2000 年以降急激に増加し、世界各地で多くの被害が発生している。昨今も日本では 2024 年 1 月 1 日に令和 6 年能登半島地震が発生し、甚大な被害がもたらされている。このような大規模自然災害の続発する大災害時代においては、地域社会の維持・存続と深くかかわる地域歴史文化の継承も危機にさらされている。

こうした状況の中で、1995 年の阪神・淡路大震災以来、被災歴史資料の保存継承に関する実践的な研究が蓄積されてきた。この中で、地域住民や研究者たちが地域社会の歴史文化や地域歴史資料にかかわり、継承してきた一連の過程全体を対象とする研究領域として、地域歴史資料学が確立された。JSPS 科学研究費補助金特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」では、地域歴史資料学研究をより追究するとともに、文献史学以外の研究成果も共有しながら、古代から現代に至る、災害史を含み込んだ地域社会の歴史像を具体的に明らかにしてきた。さらに、研究者だけでなく、地域住民みずからが地域歴史資料にアクセスし、資料の活用を可能にする地域歴史資料データインフラの構築を進め、地域歴史資料のデジタルデータ化とその利用のあり方について検討を深めてきた。

地域住民と研究者らによる地域歴史文化の継承・活用が果たす役割やその課題は、ヨーロッパにおけるそれらと共通性を有し、地域歴史資料学や歴史文化をめぐる実践的研究はグローバルな研究潮流にも位置づけることが可能であることが、2022 年 8 月の第 23 回国際歴史学会議でのラウンドテーブルにおいて明らかになっている（奥村弘「特集第 23 回国際歴史学会議 RT18. 自然災害時の歴史資料の救出と保全」『歴史学研究』No.1034、2023 年）。

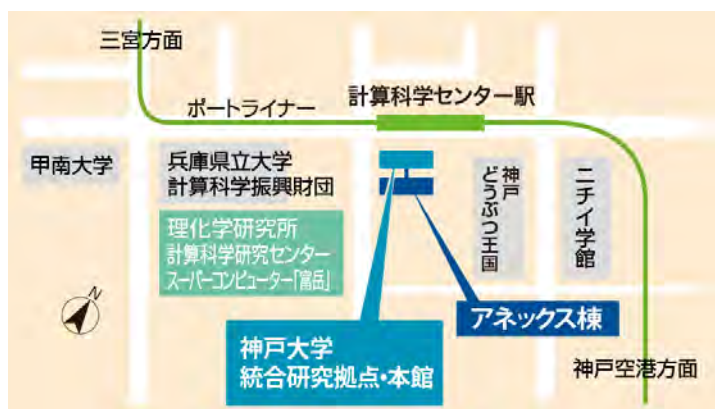
この間、地域住民を主体とした被災歴史資料の保存活動に加え、大字誌編さんや、基礎自治体レベルでの

資料ネット運動は新たな展開をみせており、実践的研究が進められている。このような新たな活動の意義や課題に関しては、それぞれの地域を中心にして議論されてきたが、世界的な事例と比較しながらより広く問うていく必要がある。

本シンポジウムでは、まず、ヨーロッパにおける文化遺産保存に関する政策に関与してきたガーボル・シオンコイより、ヨーロッパにおける地域の歴史文化遺産をめぐる現在の取り組みについて報告する。次いで、これまでの研究や実践をふまえ、日本の地域社会の基盤形成に地域歴史文化やこれを支える地域歴史資料学がいかにかかわるか、奥村弘が総括的報告を行う。特にこの間、地域住民と行う歴史資料の保存継承はさまざまな方法で進展してきた。資料ネットによる水損資料対応に関する事例報告を胡光が行い、被災資料処置の新たな手法に関する報告を天野真志が行う。また、災害に対するレジリエンスにも深くかかわる、地域や住民を中心とする災害文化を内包した歴史像の提示に関しては、今津勝紀が報告する。

地域歴史資料の継承をめぐる取り組みはパブリック・ヒストリーとも深く関わるが、日本の歴史学と市民とのかかわりの展開を、国際的なパブリック・ヒストリーの研究潮流の中でいかに捉えることができるのかを、検討していく必要がある。特に、地域歴史資料のデジタルデータ化は資料の利活用を容易にし、誰もが歴史資料を閲覧できる環境を生み出した。地域歴史資料が世界的に開かれることは、当該の地域にとって、またその他の地域にとってどのような意味をもつのか。地域歴史資料データインフラである khirin の運用と地域住民との関わり方の意義について後藤真が報告し、デジタル時代における地域の歴史実践をめぐる様相とその課題についてアンドレアス・フィッカーズが報告する。

地域歴史文化創成の成果・課題を共有し、活発な議論を行いたい。



会場【神戸大学統合研究拠点】へのアクセス

ポートライナー「三宮」駅から「神戸空港」行きに乗車「計算科学センター」駅下車（乗車時間約 15 分）南へすぐ